



Motonori Hashimoto



Takashi Imamura



Shin Akazawa



Kiichiro Kurihara



Ryosuke Hashimoto



Kimihiro Nishio



Michiharu Ogawa



Takehiko Tsukamoto



Yuji Nihei



Hiroyuki Sakai



Norihide Kitaoka



Takaaki Takashima



Kei Suzumura



Natsuko Hashiba



Yoko Okubo



Junya Kobayashi



Chiyo Yoshida



Kentaro Matsumoto



Teruyasu Tsunekawa



Makoto Wakabayashi

技科大の顔

01

2023年 秋号

同窓会と以下の在学生が協力し、制作・配信しています

機械工学系 若葉 慶友
電気・電子情報工学系 内藤 初月
情報・知能工学系 山内 凌人
応用化学・生命工学系 堀木 彩花
建築・都市システム工学系 稲垣 亮

技科大の顔-2023年秋号の配信にあたって

豊橋技術科学大学同窓会の皆様方におかれましては、常日頃より同窓会活動にご理解とご協力を賜りまして、誠にありがとうございます。

この度、季報として「技科大の顔」を配信することとなりました。
毎号、各系4名、5系で計20名、30代から60代までの様々な卒業生の方々に
ご執筆を依頼し、ご自身の活動、近況報告、今思われていること、大学や後輩
へのメッセージなど、自由にご執筆をいただく企画です。

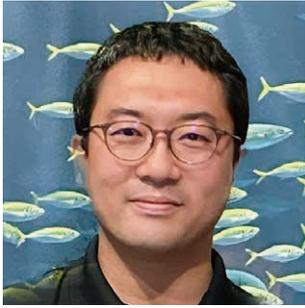
配信先は、卒業生の皆様に加えて、在学生の皆様にもお送りすることとして、
在 student と卒業生をつなぐ「顔」となり、一方で、国内外に限らず様々な地域で
ご活躍をされている卒業生の皆様方には、互いの活動を知り、ネットワークを
築く「顔」になればと期待しています。

初号となる2023年秋号のご執筆者は、初号ということから大学の先生方から
ご推薦をいただきました。

ご執筆をいただいた皆様方に深く感謝を申し上げます。

以降はご執筆をいただいた皆様から次号のご紹介を頂く形で進めてまいります。
お声掛けがありましたら、是非ご協力、ご執筆の程、お願いいたします。

初号は、卒業生の皆様のご活躍を知る素晴らしい「顔」が集まりました。
是非、ご一読いただければ幸いです。



橋本 元仙

Motonori Hashimoto

2012年 機械工学専攻 修了
戸高義一 研究室

1987年 宮城県生まれ
宮城高専 卒業(現 仙台高専)

2012年 住友金属工業(現日本製鉄)入社

2012年 和歌山製鉄所 薄板管理室 配属

2021年 瀬戸内製鉄所 薄板管理室へ異動
(特殊鋼薄板管理室、材料ソリューション研究部を兼務)

現 在 同 主幹

優秀な諸先輩方、後輩達を差し置き技科大の顔への寄稿に引け目を感じておりますが、僭越ながら在学生の皆様メッセージを書かせていただきます。

私は2012年に機械工学専攻を修了しました。楽しかった大学生活の中でも、研究に打ち込んだことは昨日のこのように思い出せます。出来が悪かった私にも、先生方は毎日のように愛ある指導をして下さり、今でも感謝の念が尽きません。また、幸か不幸か学生時代の専攻を生かせる会社に就職することとなり、研究活動で学んだことは専門知識を含め本当に役に立っています。とは言え、個人的には大学時代は何かに打ち込むことが大事だと思っています。研究でも、趣味でも、サークル活動でもなんでもいいです。卒業、修了時に「自分はこれをやった!」と強く言えることを一つでも持てるよう、大学生活を送っていただければと思います。

卒業後、私は鉄鋼会社に就職しました。鉄鋼業と言えば、最近の学生は古臭いと思うかもしれませんが、歴史がある業界なのでその感覚は正しいと思います。ただし、古いだけではなく脱炭素をはじめ新しいことにもチャレンジしている業界です。また、工業系に就職される皆さんは鉄が如何に広い分野で使われているか、如何に工業的に優れているかをいつか実感すると思います。また、詳細は述べませんが鉄は発展性があり未来もある金属です。少しでも興味を持った方は、就活のタイミングでも弊社OBにお気軽にお声がけください。

最後になりましたが、私は、技科大は尖った個性を磨くことができる素晴らしい学び舎だと思っています。その環境の中で大学生活を楽しんでください!そして、いつか皆様と仕事でご一緒できることを期待しています!



赤澤 伸

Shin Akazawa

1997年 生産システム工学専攻 修了
梅本実 研究室(現:戸高研究室)

1973年 神奈川県生まれ
一関高専 卒業

1997年 大王製紙 株式会社 入社

2011年 東洋炭素 株式会社 転職

現 在 東洋炭素 株式会社 在席中

大学院を修了後、製紙会社に入社して機械保全を経験、2011年にカーボン製造の世界に転職しました。工場管理の仕事をするなかで、2015年に海外拠点の設備導入に携わったことがきっかけで、2024年からはメキシコ拠点への赴任が決まり、その準備の真っ最中です。

在学中は自分とその周りの世界しか知らず、今後も研究・生産など工学分野を歩み続けるものと感じていましたが、就職・転職を経て50歳になった今になって『他にも楽しいことはいっぱいある』と実感できるようになりました。工学の知識はあくまでベースなんですよね。

そう考えることができるきっかけが、海外での仕事です。英語も現地スペイン語もわからずに、2015年に飛び込んでいったメキシコ。わずか数か月の滞在でしたが、コミュニケーションの重要性に気付いて帰国後に始めた英会話レッスン。やってみて、意思疎通が少しでもできると楽しくなってくるんですね。

振り返ってみるとメキシコとの接点は、梅本研究室でのメキシコ人留学生との交流から始まっています。当時、私にとっては言語の壁が高く、カタコトのコミュニケーション、しかも消極的。それでも彼らが暖かい国民性で親日的だったから、2015年の短期滞在中も苦ではなかった。不思議なもので、それぞれの時点では将来なんか見えず、目の前のことに一生懸命。でもその経験が、年齢を重ねた今になって、自分の考えや行動に繋がっていると思えるようになりました。学生の皆さん、今の自分が全てではないですよ。楽しいこと、いっぱいありますが、そう思えるようになるために、目の前の勉強に励んで欲しいです。



今村 孝

Takashi Imamura

2003年 電子・情報工学専攻 修了
寺嶋一彦 研究室

1974年 宮城県生まれ

1997年 仙台電波高専 卒業

2003年 仏パリ13大学 研究員

2004年 豊橋技科大産学官連携研究員

2005年 豊橋技科大 助手(2007年 同 助教)

2013年 新潟大学工学部 准教授

現在に至る

高専で機構学(機械構造の設計学)、大学院で制御工学と数値モデリングを研究し、修了後は渡仏シロボットの制御・シミュレーションソフトウェアの開発プロジェクトの研究員として従事しました。初めて暮らす海外での生活で、さまざまな職業の人と出会う中で、「自分の専門は?」と問われる機会が多くありました。その時の私は、興味の向くままに機械・制御・情報と異なる分野に身を置き、専門性の深さに自信をなくしかけていましたが、当時のホスト教授が、インタプリタ/インタフェースとしての多分野/異分野共同における役割を見出してくれました。現在、私は芸術、教育学、歯学等との学内連携研究に携わるとともに、人を対象とする研究倫理や、法学との連携によるELSI(倫理的・法的・社会的課題)に関する議論に参加する機会を得ています。これらは、分野を横断・融合する研究における立ち位置が明確になったことがきっかけになっています。

近年、研究の「文理融合」「分野横断」や、将来の知識活用を指向する「トランスファラブルスキル」が大学教育のキーワードとなっています。現役学生の皆さんにとっては、限られた在学期間に幅広い知識や経験が求められる大変な状況かもしれませんが、多くのチャレンジができるのも学生時代の特権です。自分の可能性を見つけるために、所属する分野や系に関して知見を深めたり、分野をまたいで交流を深めたり、学生生活を楽しんで頂きたいと思います。



栗原 喜一郎

Kiichiro Kurihara

1982年 エネルギー工学専攻 修了
本間寛臣 研究室

1957年 熊本県生まれ
有明高専 卒業

1982年 新日本製鐵(株) 入社

2013年 同上退社 日鉄住金環境(株) 移籍

2017年 同上退社 黒崎播磨(株) 移籍

2023年 同上退社 現在に至る

「百万本のバラ」の熱唱に会場が沸き、加藤登紀子のコンサートが幕を閉じた(7/8)。この歌は、ラトビアの子守歌として生まれ、ロシアで大ヒットした後、1989年のNHK紅白歌合戦で彼女が歌った。その年は、東ドイツベルリンの壁が崩壊した歴史的な年でもあった。私はリタイヤした今、好きなことをして自由に過ごしているが、この歌を聴くと、かつて自分が関わってきた仕事や海外との交流を思い出す。

私は「製鉄(溶鉄を作る)」を中心に製鉄に関する仕事に携わってきた。例えば、地球の生い立ちとともに様々な変化した鉄鉱石や石炭という資源を、高炉という化学プロセスで使用できるように工業原料に加工すること、「自然を科学に変える」ことだった。その仕事を通じて、私はロシアやドイツなど海外との交流に積極的に取り組む機会に恵まれた。1991年には、若い技術者に幅広い経験を積ませるという目的で、3ヶ月間単身でドイツ鉄鋼会社に派遣された。これが海外との交流のきっかけとなり、様々な人達と親交を広めることができた。

2011年にはロシアとウクライナを訪問した。そこで見た原料の加工技術は「目からうろこ」だった。技術者たちはこだわりと共に違う視点を持ち、ウオッカがそう強くない素敵な人達だった。翌年、百聞は一見に如かずと思い、現場の将来を担うべきスタッフを同伴し再訪した。

エネルギーの再生可能エネルギー化等、地球規模の問題の解決のために始まりつつあるパラダイムシフト。国や分野の垣根を超えた多様な人達の協力によって実現してほしい。



ウクライナのひまわり畑



橋本 良介

Ryosuke Hashimoto

2016年 電気・電子情報工学専攻 修了
井上光輝 研究室

1988年 三重県生まれ

2009年 鈴鹿高専 卒業

2016年 鈴鹿高専 電気電子工学科 助教

2020年 鈴鹿高専 電気電子工学科 講師
現在に至る

大学院博士後期課程を修了後、母校である鈴鹿工業高等専門学校の電気電子工学科に助教として着任しました。

着任してから現在まで、まだそれほど年月は経過していませんが、当時の高専は、教育重視の思考から転換し、「もっと研究を」というような声がたくさん聞こえてくるようになったように感じます（勿論、教育を軽視しているわけではありません）。その最たる例が、2020年から開始された、高専発！「Society 5.0型未来技術人材」育成事業（GEAR5.0/COMPASS 5.0）です。この事業は、Society5.0により実現する未来技術をリードし、社会課題が解決できる人材を育成する事業です。中でも「GEAR5.0」は、全国5分野6拠点に分かれて学生参画による産学連携型の社会実装研究に取り組むという、研究重視のプロジェクトです。鈴鹿高専は、GEAR5.0マテリアル分野の中核拠点校（リーダー校）に採択されました。たまたまのご縁で、私は同事業のプログラム・サポートエンジニアを務めることになり、マテリアル分野のリーダーを務める本校の兼松教授と二人三脚で事業を推進する中で、全国様々なところに足を運び、研究の連携を模索する日々を過ごしました。こうした活動を通じて自身の研究も一人の研究ではなく、地域とのつながりや社会との連携を意識するようになり、より広い視野で研究を考えられるようになってきたと感じています。

さて、後輩の皆様にも少しだけメッセージを送りたいと思います。近年、技科大（高専）出身の若手の高専教員が少ないのではないかなと感じています。学生の皆様には、ぜひ博士後期課程に進学され、アカデミックポストにチャレンジしてほしいという想いを伝えて結びといたします。



小川 道治

Michiharu Ogawa

1996年 電気・電子工学専攻 修了
太田昭男 研究室

1971年 生まれ

1996年 大同特殊鋼 株式会社 入社

1999年 日本金属学会 技術開発賞受賞

2007年 日本金属学会 技術開発賞受賞

2009年 関西大学大学院 博士

2014年 日本チタン協会 技術賞受賞

現在 副主席研究員

大学時代は太田昭男先生のご指導のもと、超伝導工学研究室でモノづくりの大切さを学びました。この当時の研究内容が私の研究者としての基礎となりました。

大学院修了後、モノづくりを実践するためには、やはり素材産業との思いで地元の鉄鋼メーカーに入社しました。配属先は研究所でチタン合金などの様々な材料開発に携わることができました。

チタン合金は、鉄鋼材料に比べて比強度（強度/密度）に優れていることから、古くから航空機産業を中心に多く使われてきました。最近では、航空機以外の用途にも適用されるようになり、チタン合金を使用した民生品も多く見られるようになってきました。チタン合金は「軽い」、「強い」、「錆びにくい」といった特徴に加えて、「アレルギーの問題が少なく、人体に優しい」といった素晴らしい特徴を持っていることから、医療用素材や福祉用具への展開が期待されています。

チタン合金について、より高度な知識を学ぶため、社会人ドクターとして関西大学に入学しました。仕事をしながら、大学に通うことは大変でしたが、池田勝彦先生のご指導のもと、製品化に結びつけることができました。希少金属であるバナジウムやモリブデンを多く含むβ型チタン合金について、価格安定化のためにクロムと鉄を活用したバナジウム・モリブデンフリーβ型チタン合金を開発し、自転車部品に採用されました。

大学で得られる知識、経験は大変重要であり、今後も産学連携などで新しい材料開発に取り組んでいきたいと思っています。



西尾 公裕

Kimihiro Nishio

2004年 電子・情報工学専攻 修了
米津宏雄 研究室

1976年 岡山県生まれ

1997年 津山高専 卒業

2004年 米子工業高専電気情報工学科 助手

2007年 米子工業高専電気情報工学科 講師

2008年 津山工業高専電気情報工学科 講師

2010年 津山工業高専電気情報工学科 准教授

2016年 津山工業高専総合理工工学科 准教授

2017年 現在 津山工業高専総合理工工学科 教授

大学院を修了後、教員として米子高専に。4年後、母校の津山高専に。気づくと教員生活も約20年。専門分野は電子回路・LSI設計。この楽しさを授業や卒業研究などを通して、高専の学生らに伝えたいと思い、現在に至る。

「低学年の授業では、電気電子の基礎をきちんと身につけるように指導。高学年では、低学年で習得した基礎知識を利用し、より専門的な内容を身につけるように指導。」と心がけている。本当にそのような指導ができていいのか？苦戦しながら、授業内容を日々考え、実践している。

バスケットボール部顧問。放課後は体育館へ。キャプテンを中心に、学生らが主体となって活動中。良いチームになっている。今は見ているだけで楽しい。

最近、電子工作を用いた出前授業・公開講座を積極的に実施。電気電子回路の楽しさを小中学生に伝えたい。参加する小中学生と補助学生の高専生。楽しく工作している姿を見て、こちらも力を与えてもらう。

現在の専門分野は、主に技科大で学んだ内容。在学中、毎日、新しい回路を考えるのは楽しかった。研究前、電子回路は苦手だったのだが。研究室の週1回のミーティングが懐かしい。長かった。今思えば、ここで大きな力を身につけたことは確信。在校生の皆さんも技科大で多くのことを学んでほしい。

もともと高専教員になることを希望して、技科大で学ぶ。ここ数年、周りの方のご協力のもと、充実した教員生活を過ごす。高専生と共に活動するのは楽しい。より良い高専を目指して、これからも日々、教育内容など検討していく。

最後に、大学進学を希望する高専生らに、こちらが推薦したくなるような豊橋技術科学大学であり続けてほしいと願っている。



塚本 武彦

Takehiko Tsukamoto

1986年 システム情報工学専攻 修了
野口精一郎・太田昭男 研究室

1961年 愛知県生まれ

1982年 豊田高専 卒業

1989年 豊橋技術科学大学

1990年 豊田高専 現在に至る

博士後期課程を3年間で無事に修了した後、さらに助手として技科大で1年間修業してから母校である豊田高専に赴任し、33年が過ぎました。

私が幸運だったのは、修士2年の年度終わりに大学に博士後期課程が設置されることが決まったことです。私の2年先輩の方々の頃から博士課程設置の話があり、設置されたら大学に残るつもりでいたのに、願いがかなわず企業に就職された方が何人もいたと思います。私も先輩の方々と同様に、博士課程が設置されたら大学に残るという条件で企業（県内の自動車関連会社）から内定をいただいて半年以上吉報を待っている状況でした。少し残念だったのは、申請していた3専攻の内、野口・太田研が所属する「総合エネルギー工学専攻」だけが設置を認められなかったことです。そこで、いろいろ配慮していただき、「システム情報工学専攻」に進学することになりました。進学後は試料作製・特性評価、学会発表、学術論文執筆に追われながらも、研究室の先生方や後輩の皆さんに支えてもらい何とか修了することができました。「昭和」から「平成」に変わったときに、博士論文を書いていたことは強く記憶に残っています。

現在は、豊田高専電気・電子システム工学科の教員として、主に電気磁気学の講義を担当し、技科大に学生を送り出す立場です。昨年度は学科で9名の学生が合格をもらい、6名が技科大に進学しました。合格者全員が進学する大学であって欲しいと思いますが、旧帝大等に合格すると、ほとんどの学生がそちらを選択してしまいます。「採用を増やしたい大学ランキング」で全国1位にランクインや「NHK学生ロボコン2023」で優勝などのニュースを耳にしていますので、全国の高専生が進学を目指す大学になることを期待しています。



二瓶 裕司

Yuji Nihei

2020年 情報・知能工学専攻 修了
中内茂樹 研究室

1991年 宮城県生まれ

2012年 一関高専 卒業

2020年 株式会社村田製作所 入社
現在に至る

就職先は電子部品会社だが、業務内容は学士～博士の研究で扱っていた脳波計の研究開発である。学生時代は使う側だったが、現在は作る側となり、学生時代の経験が活かしていると実感している。

私が行っている研究開発では脳波計を作るだけではなく、脳波計の評価や脳波計を使ったビジネス開発の仮説検証も行う。それらの業務は、まさに学生時代に行っていた研究と共通点が多く、研究で得られた知識・知見を活かして業務を進められている。就職してまだ年月は浅いが、現在開発している脳波計が世の中で使われることを目指し、日々の業務に動んでいる。

就職してからでも会社内で技科大の名前を耳にすることがある。自身の業務が関連する部署だけでなく、全く異なる部署からも聞こえてくることがある。会社内で出身校の名前が出てくるとは、存外嬉しいものである。学生のときはあまり気が付いていなかったが、技科大の研究は世の中から注目されている。在学しているときは技科大の知名度はそんなにないのだろうと思っていた。そのため、自己紹介の際も愛知の大学と端折って説明してしまうことも多かったが、そんなに卑下するほどではないらしい。後輩の皆さんは、どうか私のように卑下せずに堂々と胸を張って技科大の名前を言っていただきたい。また、技科大のOB・OGが自己紹介の際に自慢できるような研究成果等を期待している。私も技科大関係者の皆様が誇りに思えるような仕事を世の中に出していけるよう励む所存である。



北岡 教英

Norihide Kitaoka

2000年 電子・情報工学専攻 修了
中川聖一 研究室

1969年 三重県生まれ

1987年 三重県立四日市南高等学校 卒業

1994年 日本電装株式会社 入社

2001年 豊橋技科大 助手(2003年講師)

2006年 名古屋大学 助教授(その後准教授)

2014年 徳島大学 教授

2019年～ 現在 豊橋技術科学大学 教授

私は本学卒業生を名乗っているが、一般的な学生を本学で経験したことはない。他大学の修士課程を修了後、自動車関連会社に就職し愛知に住む。そんな会社の中で異端ともいえる音声認識の研究開発をし、当時は画期的だった音声認識機能付きカーナビゲーションシステムを世に送り出した。研究開発から取り組んだ技術が製品に活かされるのは感慨深いものである。愛知でこんな研究をしていた縁もあり、豊橋技術科学大学で一線活躍されていた先生の研究室の門を叩き、社会人博士学生として受け入れていただいたのが本学との馴初めである。

社会人博士学生は、当時はまだまだ少なく、いまよりも頻りに大学に通っていた。毎週月曜の昼食会と輪講には参加し、若い学部や修士学生たちの発表を聞いたり自らも発表したり。月一回程度の土曜日の研究報告はもちろん、研究室旅行にまで参加(写真は当時のもの)。会社で製品化のために月何十時間も残業しながらの“二足の草鞋”は、若かったからできたんだあと、いまさらながら振り返る。

さて近年。幸いにも情報技術者は売り手市場、転職も当たり前。こんな時、「博

士」は通行手形である。修士で研究開発職に着いた皆さん、まだ博士は取れます。いや、社会人となって博士を取るのには、キャリアアップの必勝法(注:当時ほどの残業はないはず)。技科大修了生みなで、情報科学を、工学を、盛り上げましょう。先輩として、そして教員として、応援しています。



酒井 浩之

Hiroiyuki Sakai

2005年 電子・情報工学専攻 修了
増山繁 研究室

1977年 岐阜県生まれ

1998年 岐阜高専 卒業

2005年 豊橋技科大 知識情報工学系 助手

2010年 豊橋技科大 情報・知能工学系 助教

2012年 成蹊大学 理工学部 情報科学科 専任講師

2014年 成蹊大学 理工学部 情報科学科 准教授

現在 成蹊大学 理工学部 理工学科 教授

私は成蹊大学理工学部の言語情報研究室にて、自然言語処理を活用し大量のテキストデータから機械学習等を用いて重要な情報を抽出する技術であるテキストマイニングの研究をしています。言語情報研究室では、特に、決算短信や有価証券報告書等の金融テキスト、WEBサイト、新聞記事、特許などを対象としたテキストマイニングの研究を中心に実施している点が特徴です。金融テキストを対象とした研究を行うきっかけは、私が技科大生だったときに趣味で株式投資を行っていたことです。投資対象の企業について深く調べるには、(学生にとっては敷居が高い)決算短信等の金融テキストを読む必要があり、当時の知識では限界がありました。効率的な株式投資のためにもっと簡単に企業の情報を得たいと思い、そこから金融テキストの自動要約と関連する自然言語処理に興味を持ち、自然言語処理の研究をしていた増山繁先生の研究室に所属しました。増山先生のご指導のもと、2005年に博士(工学)を取得し、その後、増山研究室の助手に採用して頂きました。決算短信などの金融テキストを対象とした研究は、増山研究室での助手時代に始めました。当時は金融テキストを対象とした研究はほとんどなかったのですが、最近では金融機関でもAIの活用がすすみ、金融テキストを対象とした研究も増えてきました。学生時代の趣味から自分の研究がはじまり、そして今でも関連の研究ができてきていることは、とても幸運なことであったと思います。ChatGPTの出現によって大規模言語モデルによる生成AIが注目され、自然言語処理はもちろん、多くの分野が大きな変革期を迎えています。将来何が役に立つかわからないので、後輩の皆様には、勉強だけでなく趣味や遊びにもおおいに頑張してほしいと思います。



高嶋 孝明

Takaaki Takashima

1982年 情報工学専攻 修了
大岩元 研究室

1958年 滋賀県生まれ

1978年 岐阜高専 卒業

1982年 日本アイ・ピー・エム 入社

2011年～ 2014年 豊橋技術科学大学 同窓会会長

2013年 日本アイ・ピー・エム 早期定年退職

2014年 豊橋技術科学大学 教授

2021年 国立高等専門学校校機構 特任教授

現在 バンコク赴任(タイKOSENプロジェクト)

いま私は、タイのバンコクに住んでいます。IBM勤務時代の先輩や同僚の中には、定年退職してバンコクのスクンビット通りでルーフトッパーを経営したり、マンションを所有してゴルフ三昧の生活をしている人がいます。私は、そういう悠々自適の生活を横目でちょと羨ましく見ながらも、自分はそれはもうちょっと先にしておいて、日本とタイ政府がODAの円借款事業としてタイに創った日本式の高専(KOSEN)の設立のお手伝いをしています。

岐阜高専を卒業し、豊橋技科大の第一期生として修士課程を修了し、IBMに入社したのは40年以上前の1982年。当時はまだ一般的ではなかった、ユーザーインターフェースやコンピューターの使い勝手に関心を持ち、タイピング練習プログラムを開発し、色々な研究会に出かけて行ったことを、つい先日のように思い出します。日本IBMにHuman Factors部門を新設するというタイミングと入社が重なるご縁で、IBMでのキャリアが始まりました。その後、ハードディスク部門やテクノロジーサービス部門、コンサルティングなど、10以上の仕事を経験しましたが、どれも全てIBM内でグローバルに新規に創設するビジネスを体験するという、今思えばとても貴重な経験をすることができました。

豊橋技科大の同窓会長を拝命したご縁で、32年勤務したIBMを早期退職して豊橋技科大のスーパーグローバル大学事業のお手伝い、そして2年前から新たなご縁があって、タイKOSENのお手伝いをしています。自分自身の人生の原点である高専から始まって 高専→技科大→IBM→技科大→高専 という、実はプログラミングされていた赤い糸で結ばれたご縁の恩返しに人生のかな、と思う今日この頃です。10月末位にタイ赴任の任務を終えて日本に戻ります。



鈴村 啓

Kei Suzumura

2009年 エコロジー工学専攻 修了
水野彰・高島和則 研究室

1984年 岐阜県生まれ
2005年 岐阜高専 卒業
2009年 ダイキン 工業株式会社 入社
2015年 同 滋賀から大阪に転勤
2022年 同 上海から大阪に帰任
現 在 同 チームマネージャー

大学院を卒業後、空調機製品メーカーに入社。気が付けば14年の月日が経ち、子供の成長と見比べながら、技術者として成長し続けられているのかと過ごす日々。

空調は、冷やす・温める、空気を綺麗にすると比較的単純な機能であるが、中国の大学では、制冷工学科が設けられるほど、学問として成立するくらい奥が深い分野。そんな多岐に渡る知識が求められる分野において、国内外での設計業務から研究開発業務と幅広い領域で技術者として仕事に携わっているのは、多くの仲間に使われているからだと思う。

学生時代は、全国津々浦々から集まった濃い仲間と自然豊かな豊橋の地にて、勉学、遊びを含め濃い時間を過ごす。当時、大学は全国的にも珍しい3学期制を採用しており、他大学に比べてテストが多く、落第の恐怖に怯えながら、その緊張感のなか、それぞれが得意とする教科を教え合い、誰一人教科を落とさずに進級できたのは忘れることができない記憶。自分が得意としない分野でも、人に教えるを請い、幅広い技術を技術として理解しようと努力できるのは、本質を理解することに重きを置いて、互いに教え合う大学の同志がいたからこそ。

先が見えないこの時代に大志を抱くのは難しいことであるが、学生時代をともにする仲間、先輩を大切に、様々な経験の一つでもより多く積み、目の前にある大学生活を満喫し、楽しんで欲しい。そして、そこから学んだ感動や経験は、強い武器になるし、社会に入ってからでも活きると思う。今ある仲間を大切に、これから出会う人との繋がりにときめきながら、大学生活を豊かに過ごして欲しいと、これから社会へ出る後輩たちに言葉を送りたい。



大久保 陽子

Yoko Okubo

2007年 環境・生命工学専攻 修了
平石明 研究室

1969年 愛知県生まれ
1987年 愛知県立豊橋東高等学校 卒業
2014年 豊橋技術科学大学研究推進
アドミニストレーション
2000年 同 センターURA
現 在 同 主任URA

大学院時代は、平石研究室で朝から晩まで、光合成細菌の培養に明け暮れていました。養豚場にせせと通っては、豚の排泄物や汚水等から廃水処理に有用な細菌を探索するという、私にとってはとても充実した研究生活を送ることができました。指導教官の平石教授からは厳しく指導していただいたものの、生来の頑固でのんびりした性格が災いし、博士後期課程を修了するのに4年もかかってしまいました。

大学院卒業後、紆余曲折を経て、豊橋技術科学大学にURAとして採用されました。当時は、事務職でも研究職でもない「リサーチ・アドミニストレーター（URA: University Research Administrator）」という職業が定着しておらず、一体何をやればよいのか右往左往するばかりでした。その当時、たまたまお会いした平石教授から、「URAは今後大学にとって必要な職業になるから、頑張りなさい」と言っていたことを今でも強く覚えています。

現在はURAとして、大学の研究力の分析、知的財産や共用研究機器の管理といった、研究者を陰から支える業務を行っています。失敗して落ち込むことも多いですが、周りに支えられて今日までなんとか続けられています。

残念なことは、職場に若い人がいないこと。大学間の競争が激しくなる中、大学の在り方も変化しています。その変化に対応するには、若い人だからこそ柔軟な発想と失敗を恐れない姿勢が必要です。現役または卒業生のみなさん、URAという職業を目指してみませんか？



橋場 名津子

Natsuko Hashiba

2002年 エコロジー工学課程 卒業
藤江幸一・後藤尚弘・大門裕之 研究室

1979年 愛知県生まれ
1997年 愛知県立時習館高等学校 卒業
2004年 国立大学法人豊橋技術科学大学 採用
現 在 同 入試課

大学院進学と同時に休学し、交換留学生としてドイツに行きました。海外に漠然とした憧れだけで渡った私は、ドイツ語はもちろん、英語もほとんど話せない中、毎日が苦痛で研究室以外は部屋に引きこもる日々。。。そんな時、留学先の大学で留学生向けのドイツ語講座を受講したことをきっかけに、他の留学生と友人になりました。彼らと交わらうような仕事をしたと思い、帰国後は早々に進路を切り替えて、大学職員になりました。

母校である大学に採用され、教務課で履修登録や授業など先生や学生と関わった後は、総務課で福利厚生の仕事につき、現在は入試課で働いています。入試課では入学選抜（いわゆる入試）に関わる仕事と、本学を高校生に知ってもらう入試広報を担当しています。入試広報では、大学フェアや高校に出向き、大学紹介・進路相談を行うのですが、熱心に耳を傾けてくれる高校生に、いつも胸がじーんと熱くなります。

今年、2023年日経新聞社の大学イメージ調査で、豊橋技術科学大学は「採用を増やしたいランキング」で1位になりました！みなさん知っていましたか？有名大学ほどの全国的な地知名度はなくても、社会に出たら評価が高い！そんな大学で学んでいることを誇りに思っ、社会に羽ばたいて欲しいと思います。

1人でも多くの方に本学を知ってもらい、入学生にはこの大学を選んで良かったと思ってもらえるように、これからも大学を盛り上げて、できれば自分も楽しみながら頑張りたいと思います(笑)

後輩のみなさん、大学で過ごす時間はあっという間です。やりたいことは全力で楽しみ、苦しめば、いつか自分の糧になります。頑張ってください！！



小林 淳哉

Junya Kobayashi

1986年 物質工学専攻 修了
上野晃史 研究室

1962年 北海道生まれ
1982年 函館高専 卒業
1986年 出光興産株式会社 入社
1988年 出光興産株式会社 退社
1988年 函館工業高等専門学校 着任
現 在 に至る

技科大時代は触媒開発、企業及び函館高専に着任後も一貫して触媒や無機材料合成を専門にしていますが、函館高専着任後、当地は数十年間日本酒の酒蔵がないことを地元産業界・観光・飲食業が憂いている現状と、「誰かがやってくれないか？」という思いを折々感じていました。そこで、10数年前、全く分野違いますが一念発起して酒造免許を取得して日本酒醸造に取り組み、新規醸造酵母を発見し、まずは兵庫県の蔵への委託醸造による函館市公認の地酒販売など実現できました。その後数年を経て一昨年ついに地元で54年ぶりの酒蔵「五稜乃蔵」の建設が成り、清酒「五稜」を醸造・販売しています。そしてこの酒蔵内には、『函館高専醸造ラゴ』を設け、「函館に新たな食文化を根付かせたい」という目標のもとさまざまな方々が連携しています。今や私は無機材料が専門なのか、日本酒醸造が専門なのか？コーディネータなのか？の状態です。

在校生の皆さんは現在の専門分野に誇りを持ち、研究を進めていることでしょう。それは正しいです。しかし学生時代の専門性だけにこだわり「これは私の専門じゃないからやらない」という頭の硬い社会人たちも多く見えました。これは「あなたに期待している」と言う相手の思いを裏切り、社会課題の解決というエンジニアの使命にも反します。複雑化する社会課題を解決するには「じゃあ誰を巻き込もう？」というコーディネート能力も必要になっていると思います。起業を目指しているならこれは当然ですね。

さて皆さん、函館にお越しの際はそこに母校の先輩が関わっていたというちょっとした思いも持って、ぜひ「五稜」を飲んでください。





吉田 千代英

Chiyo Yoshida

2009年 建設工学専攻 修了
加藤彰一 研究室

1983年 三重県生まれ

2001年 三重県立津高等学校 卒業

2009年 (株)NTTファシリティーズ 入社

2019年 (株)NTTファシリティーズ 退社

2019年 (株)辻工務店 入社
現在に至る

仕事の合間にこの文章を書いています。大学に入学したのは今から20年前であの頃を思い出すと、いろいろと思いを馳せて、しみじみします。

入学した頃は、漠然と『将来は建築に携わる仕事に就きたい』くらいにしか思っていない、明確な目標のない学生でしたが、強烈な先生方や個性的な学友、優秀な研究室の先輩方に刺激を受けながら、いつの間にか『やりたいこと』が明確になりました。大学院では施設マネジメントの研究をし、修了後に全国で施設管理を実施している会社への就職が決まった時は、大学で学んだ事を仕事にできてうれしいと感じると同時に、いつの間にか目標を定めて、邁進している自分のちょっとした成長に驚きもありました。

本社のある東京かと思っていた初赴任地は自身未踏の地・仙台で、東北全域の通信建築の保守管理を統括・支援する部署でした。生活も仕事も覚えることが多く、一生懸命に過ごしていました。そんな中、東日本大地震が起こり、復旧に向けた日々は特に毎日が必死でした。これらの経験が、その後の仕事への取り組み方に大きな影響を及ぼしていると思います。

今は三重県に戻り、地元に着した建築の仕事をしています。卒業する頃に描いていたキャリアデザインとは異なる状況にあります。今も自分が成長できるように何事にも取り組んでいます。状況が変わっても軌道修正しつつ、柔軟になっていることも成長ポイントかもしれません。

学生時代は希望や不安等、盛りだくさんで余裕がないかもしれません。それに人生何が起こるか分かりません。でも、自分のペースで前進していれば、いつまでも成長し続けていけると思います。学生の皆さん、応援しています！



恒川 照康

Teruyasu Tsunekawa

1995年 建設工学専攻 修了
河邑真 研究室

1971年 愛知県生まれ
豊田高専 卒業

1995年 鹿島建設株式会社 入社

1999～2016年 シールドトンネル工事(中部・北陸)

2018年 陸上風力発電設備 基礎工事(中部)

2021年 原子力発電所再稼働 安全対策工事(東北)

現在 プラント設備 建設・保全工事(中部)

豊橋は風が強く、高専まで取り組んだソフトテニスをやめ、少林寺拳法を始めました。少林寺拳法は一生続けられるスポーツと思っていましたが、歳には勝てず30代で引退しました。40代は息子の友人のパパさんたちと、部活の観戦や送迎を行いました。現在はテニスに打ち込んでいます。健康を維持でき、仲間と体を動かすことは気持ちも晴れます。豊橋の海ではサーフィンを、会社の同僚や息子と楽しめました。今でも大学に年に数回伺いますが、必ず表浜に立ち寄り、潮風と潮の味を確認します。魚・野菜も果物も三河弁も◎です。

ゼネコンの鹿島建設に入社し、主にシールドトンネルの施工を管理しました。シールド機内からは見えない土や礫の動きをイメージし、掘進をコントロールします。長距離の掘削に耐えることができるように特許も取得しました。多くの仲間と、頭と体と運を使って自然に挑戦し、完工させる喜びが醍醐味です。現在は、所長として現場を統率しています。鹿島建設のリクルータを務め毎年1名以上の後輩が入社しています。ものづくりを主体的に体験できます。学生の皆様には、興味を持ったことに果敢にチャレンジして欲しい。技科大生の可能性に期待しています。



松本 健太郎

Kentaro Matsumoto

2008年 建設工学専攻 修了
山田聖志 研究室

2008年 石井鐵工所 入社

2023年 GX事業部
現在に至る

大学院では構造系の研究室に在籍し、卒業後は石油やLNG、アンモニア等のタンク建設やプラントエンジニアリングを手掛ける企業に入社しました。

入社後は、国内や台湾、シンガポールに建設するタンクの設計に携わっており、かれこれ15年になります。タンクもいかなればただの容器ですが、奥が深いもので、材料選定や構造設計、溶接や建設方法の検討など、やることは多岐にわたります。高校から建築の勉強をしてきましたが、今ではすっかりプラント業界に染まりました。今後はGX(次世代エネルギーへの転換によって持続可能な社会を実現する取り組み)に貢献しながら、社会のエネルギーやインフラを支えていきたいと考えています。

プラントは建設の規模が大きく、かつ運転後は危険物を取り扱うため、設計や施工に不備があると重大事故につながりかねません。「医者は一回の仕事で一つの命を預かるが、君たちは一回の仕事で数千、数万の命を預かる」と講義で教わったことがあります。今も学生時代の教を胸に刻み、安全と品質が確実に確保されるよう仕事に臨んでいます。

技科大生の頃を思い起こすと、講義が多く、勉強が大変だった辛い記憶が真っ先によみがえりますが、今は大学で得た知識や勉強する習慣が仕事に役立っています。在学生の方には技科大でたくさんの学びを身につけて巣立ってほしいです。



若林 亮

Makoto Wakabayashi

1985年 建設工学専攻 修了
渡邊昭彦 研究室

1961年 石川県生まれ

1981年 石川高専 卒業

1985年 株式会社日建設計入社

2015年 同社執行役員設計部門代表

現在 同社デザインフェロー

2020年～ 同窓会会長

写真:鈴木文人写真事務所

2020年から同窓会長を務めさせて頂いています。就任直後にコロナ渦となり、同窓会として困窮する在学生の支援を行えたことに改めて皆様に感謝申し上げます。一方で、国内外、様々な地域で活躍されている同窓生の横のつながりを築くことが同窓会の課題で、その一助となればと、この「技科大の顔」を企画した次第。この秋号を初めに長く継続されることを願っています。

さて、大学院を出た後、建築設計事務所に入社。新人、中堅、ベテランの時代を過ぎ、少し先にゴールが見えてきた昨今。建築の仕事は良くも悪くも自分の痕跡が街に残るものと思ひ、後悔せぬよう一心不乱に時を過ごしてきました。

その中で30代に設計させて頂いたのが掛川市庁舎。当時、名物市長と言われた榛村市長からの「真に市民に開かれた市庁舎とはどのようにあるべきかを考えてほしい」との問い掛けが大きなきっかけとなり、自分のためのデザインではなく、街のために、人のために、地球環境のために、いつも「のために」がデザインのテーマとやりがいに。時に大きな苦勞もするけど、建物ができ集う人達の笑顔を見た時の喜びは何よりも大きい。

在学生や様々な分野で活躍されている皆さんの「のために」の技術と力が、多くの人の喜びになることを願っています。

